

# 題未定

—わが  
終末記

## 第一回

橋本 憲三

はしがき

数えてみればあなたが亡くなってから思いがけない長い月日が流れ去ったものだ。まだ昨日のような気がしているのに、もうあと三週間もすれば満六年になる勘定だ。

しかし私の生命の終わりはもっとかけ足で近づいているといわねばなるまい。そこで、早く最後の仕事を片づけて自由の身となり、すすんでその時を迎えたい。その時まで、この終末記を書くことにしよう。

最後の仕事というのは、彼女がのこした「がらくた」(彼女のこば)を点検し、整理し、処分することであるが、その「がらくた」には、いちがいに焼却してしまいうには惜しまれる何かがまじっているかもしれない。そんなものが出てくれば拾い出して書きとめる。ああ、あの何万枚

かのカード! 専用のカード箱や机の引き出しや、ボール箱におさまっている研究カード! それを一枚一枚めくって見たら相当量の完全な短章をみいだすことは決して難くはないのだが、そういう時間も根気も、もはや私には残されていないことを告白しなければならぬ。遅すぎた! 私の書くのは、妻の死に運命的におくられてしまったしばらくの生存を強いられた男の孤栖記—彼女への語りかけ、追憶と独白、けっきょくいつ死ぬかといったような日常のメモであろう。漠然としていつは何を書いているのか自分でそれがわからないのが実状である。あるいはそのうち、たとえば彼女の死をめぐる一グループの人たちと私との間に発生した事件などに触れる場合があるとすれば、私は、生命の尊厳への冒瀆として告発の姿勢をとりたいとするかもしれないのだ。こんなときは私でなくて私のペンの方で気をきかせてそれてしまおうとするかもしれない

ない。あなたがあんなにそれをよるこばなかったのだから。そのためにのみ、「火の国の女の日記」にも私のペンがうごいてくれなかったのだから。しかし「真実」はあらわれるであらう。

何はともあれ、今日ただいまから書きはじめよう。

登場人物にはいっさい敬称を用いず敬語もできうるかぎりつかわないことにしたい。これにはちょっと自分でもはじめかかなりの抵抗を感じたけれども、すぐにその方がけっきょくこだわりがなくてよくはないかと思いかえした。

(昭和四十五年五月十五日午前九時  
窓からあなたの墓碑をながめつつ)

— まだ生きている

われわれはやがて

死ぬが

いまはまだ

生きている

これはあなたがある人におくった言葉である。森の家の研究室にはいる前の年の昭和五年ではなかったかと思う。その人の名もおぼえている。「婦人戦線」のメンバーで、

詩集「発生」を自費出版した野村考子。詩集にはあなたも序を寄せている。この女性はそのころ悩み多い生活を送っていて、それを逸稿に訴えていた。あなたは真剣に受けとめて、そのとき右の言葉をありあわせの色紙にしたためて贈ったのだ。高踏的な、それゆえいくぶん謎めいてはいるが、彼女にしてみれば、自他をくるんで慰さめ励ました言葉にちがいはあるまい。われわれはおたがい可能性をためしつづ限りある時間・人生を積極的に生きたいものであると。その後この女性とは同好の詩人と幸福な結婚をした。が、森の家の「面会謝絶」とともに自然に消息が絶えた。

私がいまこの言葉を冒頭に引用したのはあなたが付与した意味とは関係なく、私そのものがただ事実において「まだ生きている」ことをいいたかったからだ。

私は昨年の三月から感冒のため臥床がちとなり、そのうちかぜはとれたが全身に神経炎らしい極度の不快感を覚え、その日の天候によって心身の乱調が顕著に知覚されるようになった。私は亡き妻についての医者ざらいで、感冒などは市販薬ですまし、よくなるまでベッドに親しんでやりすごすのがつねであるが、ここの肉体の苦痛となると、がまんすることができない隠病もので、ついに水俣市立病院に出かけた。ここは熊本県下では有数の病院の一つであるとの

こと。私の居室からみえていて、三百メートルくらいの距離だろう。ところが、病院の内科では「慢性胃炎」とのこととで胃腸剤と消化剤を与えられたばかりで、私の全身疼痛の訴えはとりあげられない。ついでに循環器科にいった。ここでひととりの精密検査を受けたがまた軽く扱われ服薬の必要もあるまいという。それで強いて主訴をくりかえし、とにかく五、六種の薬剤を調合した散薬の投与にありついた。循環器科のカルテには「自律神経失調症のうたがい」と鉛筆で書き込まれていた。二科とも二週間分ずつの投薬を受け、再診をもとめることも憚られるような状況のまま八月までその服薬だけをつづけた。

九月から年末までは、あなたの久具小学校―所在地現在松橋町、松橋町は彼女生誕地―から熊本師範学校までの幼な友だち坂崎かおるの娘にあたる、もと市立病院内科勤務の医師で、洗切町に開業したての佐藤千里の医院に通った。私の住い幸町から十分とはかからない。私はあなたが知っているように体質的にコタツとか木炭火鉢とか石油ストーブとかをきらい、結婚当初は寒がりやのあなたに期せずして苦痛を与えた。やがてあなたには手当てをしたが、私は極力避けて過ごした。その私がこんど市立や佐藤医院で暖房室のみならず冷房室にも五分といると非常にくるしくな

ることの経験をした。こまっと通院をやめ、今年のはじめから三月まで自家療法にかえた。ちょうど、三共製薬会社から「トリメートE」という、神経の働きをよくする、新薬が売り出されたので、新聞広告をみて、私の姉妹の家―私がそこで食事している―の人にとのんで水光社の薬品部から買いためた。説明書によるとこの新薬は、活性型ビタミンB1のほかB6、B12、ビタミンEの総合製剤であり、私がこれまでもとめて求めえなかったものの一つのように思えた。これが効いたかどうかはもとよりわからないが、前記の三カ月間ぶじに過ごすことができた。原発点が胃部にあると思われる全身の神経炎らしい症状がおさまったのだ。

一月十九日の日記に、「昨日から体調がよい感じ」としてある。翌日の日記には、「Mさん、妙子さん（妹）、久木野日当野ゆき。居室の前の県道（旧国道）から窓べに立っている私をみて自動車をおりてあいさつ。きょうから山の家びらきのこと」とある。Mさんは「高群逸枝雑誌」同人石牟礼道子。自家白浜町―通称日当猿郷―の書齋を出て水俣大橋を渡り、波切町をへて教育会館と市公会堂の前を過ぎ、私の家角にさしかかったのであって、かねての懸案であった山の家の第二仕事場への出発であった。

私は翌朝家の前からバスに乗って久木野に向かい、竹下橋下車、近道をとって急坂を登っていった。樹林帯の突き出たところに、世田谷の森の家の大杉くらのものが四、五本青空に聳立していた。佇立してしばらくみとれた。カメラをむけることなどは忘れて。彼女の話と五万分の一地図を調べていたので迷うこともなく日当野部落からさらに三軒きりという開拓地区にたどりついた。バス四十分、歩行四十分。この道行きは快適で歩調も呼吸もみだれなかった。

山の家が最初わからず、そこから急に茅草を分けてゆく細道を突っ切り、山頂の樹林帯の中にはいり込んだ。樹の間から眼下はるかちよとした集落がみえる。引きかえして山の家や前景などの写真を撮り、その戸をたいた。たたきながら「しまった」と独語した。自分はいま明らかに不時の闖入者だ。これは世田谷の森の生活の鉄則を忘却した行為だ。私は深く恥じた。――このことは他日くわしく書きたい。

帰りは、道をまちがえて、山の前が終点という自動車の通り道をくだり竹下橋に出て五時ごろ幸町に帰った。竹下橋の近くに山野線久木野駅がある。始発は水俣であるタクシーを利用すれば私の家から山の家まで三十分、料金

千円たらずという。私はすこしも疲れを知らず、その夜は熟睡に恵まれさえた（ふだんは薬をのまないかぎりありえない）。

このように調子がよかったのが三月末になるとまたおかしくなり、こんどは加えて日々体力の低下を意識するようになった。また市立病院を訪れ、一年前のカルテと照合してどのような変化を示しているかも知りうる便宜からも、昨年と同じように内科と循環器科とで精密検査を受けた。昨年の胃の透視ではすこしびらんがあるという程度であったものが小さい潰瘍があるとされて内科で「胃潰瘍」の病名をカルテに記入された。循環器科では昨年よりいくらかよい方にむかっているらしかった。血圧は一三四―一八〇から一四五―一八五程度で、血液中のコレステリンは二五〇から一七六に減っていた。カルテの病名には「右胸ブロック不完全の傾向」と鉛筆でしるされた。軽微の右心臓の異常がみとめられるというのである。服薬の要はないとのことであった。

内科で出された三種のうちどれかが著明な副作用、顔面紅潮、視力減退および頭痛等があるので中止。胃カメラを撮ってみると、撮影条件「良」において潰瘍はなく、軽度の表層性胃炎との診断にかえられ、服薬の要はあるまいと

のことであつた。私のものとめによりそれでは消化剤でもというこで、こんどの診断の結果は他愛もないものに終わってしまった。私自身は現実にくるしんでいるのに、それと与えられたものは消化剤ネオオモール一剤！ 価二週間分一四円。私は一軒家に一人きりのくらしで世帯主、したがって国民健康保険自己負担分三割、それがこの二週間分一四円だ。

私はできるだけ長生きしたいと希望しているのではないのだ。売薬を利用したり病院にいったりするの、当面の肉体的苦痛、からのがれたためである。じつをいえば私はいつも死を欲しているのである。それもはっきりいえば自然死ではなくて自死なのだ。私一個にのこされた仕事があるから、つまり「まだ生きている」のだ。

(昭和四十五年五月十五日)

## 2 H家とわが生活

十八日は高群の月例生誕の日だ。早朝、書斎の庭から花を切ってきて居室の遺影に供えた。ついでにいえば、この書斎は高群逸枝雑誌編集室でもあり、やはり一軒家で夏の暑いあいだ私はこの家でくらし、冬の寒いあいだは自分の

家のコンクリート造りの二階でくらししている。母屋の姉妹の家、私の家、妹の遊休家屋である私の書斎の三軒は、木立を挟んでほぼ三角点をなす。いま三代目の和宣一兄の三男を養子とした一が主となり経営されている合資会社橋本商店(従業員七、八人)は私の姉フジ子が初代、妹静子を養女として英雄を婿取ったのが二代で、店舗はわれわれの屋敷から道をへだてて筋向かいにあり、和宣一家五人の住宅がその後ろにある。母屋にはいま姉が病んで病室にこもり、二年近く一週二回は松本医師の往診を受けており、私のもとと書斎であつた二階二室には従業員大津将弘和子夫妻が両児を擁して住み、和子妹雅子21歳もいる。食事は和宣一家を含めて母屋の食堂で流れ作業のように順繰りに振られてゐる。私は出かけたり、出かけるのを忘れると気がついた誰かが持ってきてくれる。私の室にはその他の出入は禁じてある。私はいつもひとりぼっちだ。あなたが亡くなってから、たとえ姉妹の家であろうとも私には他と共同生活することはとてもできっこないのだ。

朝食後市立病院に出かけた。妹の静子もあとからやってきた。静子は二月二十三日に夫英雄63歳を失った。英雄はゴルフが唯一の娯楽で一月一日も出水のゴルフ場に出かけてそれをたのしんだのが翌日発病、たちまち骨髄腫に突

じて急逝した。静子はちょうど私が妻を癌性腹膜炎で失った直後とほとんどひとしい状態となり、精密検査しても異常なく、ただ著しく心身の違和を訴えての病院通いだ。私にも覚えがあることであられた。

東京第二病院にあなたを見舞いに航空機で飛んできてくれた夫妻、とりわけあなたが愛した静子。あなたの没後、医者通いをしながら自伝「火の国の女の日記」を整理したり、書き継いだりしているひとりぼっちの私をみかねて、二た月のうちの二週間ずつ十回ぐらいやってきて何彼と援助してくれた静子。むろんまだ老齢というでもないのだからそのうち立ち直るだろう。

病院を出ると新国道(三号線)からあなたの墓碑が正面にみえる。それをみながら歩いて水俣橋をわたり、市役所の前を通って左の山道を登った。一二〇メートルくらいの坂で、ついこの間、熊本年鑑社の畠田真一中国に木を植える会の提唱者と同道したとき二〇度くらいの傾斜かと話し合ったその坂道がいくらか呼吸を荒らした。朝倉響子のあなたのレリーフに對面して祝福の接吻をおくった。が、胸が痛む。

松橋町長から、この町の名菓といわれる月知梅を送ってきた。昨年から高群文庫の高群の録音テープが使用にたえ

なくなつたから貸して欲しい、再録音する、このような話があつて、こちらで再製して届けようということになつていたが病氣などのために早く一台のテープレコーダーは石牟礼家から借りていながら果たせなかったのを、数日前よりやくこしらえて送ったのにたいする返礼であつた。

それをもつて近所のアパートに伊東紀美代を訪れた。彼女は東京の人、近年福岡に住み、昨年水俣に石牟礼道子を訪ね転居。福岡在住のころから「高群逸枝雑誌」を読み、自然私とも相知るようになり、先日母親持参のお菓子の裾分けに預かつていたからその返礼にもと思つたのである。水俣病対策市民会議や水俣病を告発する会や石牟礼道子のよい協力者としてこちらに長くいたいとのことをきいていた。水俣病関係のニュースをきいた。私は水俣来住後は「持衰生活」(ここにある持衰とは単に文字どおり衰えを持つ意味であつて「魏志倭人伝」にみえる持衰ではない)を送ることを本意として世事や運動にはタッチしない(持衰でできない)こととときめ、ただ「高群逸枝雑誌」の発行責任者としてありたいとした。そんな話をした。

居室に帰って、これを書いてみると、前の旧国道をチッソ会社新日窒労組の人たちが赤旗をたてプラカードをかかげてぞくぞくと繰り出してきた。「人殺しチッソ会社」

「恥を知れ、人權無視の会社」などという文字が、私のおとろえた視力によってもとらえられた。デモ行進は三時四十五分から四時五分まで続いた。

畠田真一からよいたより、というより、よい返事をもらったのでうれしく、すぐ札状を書いた。

「むすめ巡礼記」で私の申し出をそのままご承諾いただいて感謝します。筆写のこと、万事お願いします。このことではあなたのご指示に従うつもりです。筆写くださるみなさんよろしくおつたえのほど願います。

中国に木を植える会の機関誌3号遅刊のよし、私の方の雑誌8号も近く原稿しめ切り期限がきますが原稿の集まりがどうかと心を痛めているところです。

畠田来訪は去る四月二十九日の昼頃で、翌三十日の水俣病を告発する会の水俣での抗議行動について、その夜の教育会館における集会および翌日の市中デモに参加のため来水、そのついでをもつてみえたのであるが、翌日のデモが終わってから再びみえ、かれの博識家らしい談話をよろこび聴いた。私が昨年から死に関する本を読みたがっているとして、「死後の世界」という新書版の本をもっているから貸そうといい、また私がある必要から大正七年に九州日日新聞（熊本日日新聞の前身）に百余回連載された高群

の「娘巡礼記」のゼロックスか筆写を欲しがっていることを話すと何とか考えてみようと思えてくれた。

墓参の申し出に恐縮しながら同道―私は自ら案内することを忌避しているのだが―し、かれから花を供えてもらった。うぐいすがないていた。そして水俣警察署の産交快速バス待合所でまたしばらく話して帰郷を見送った。

かれから程なく、熊日社との間に閲覧許可のとりつけができたこと、借り出しはゆるされないからゼロックスをとることはだめで筆写によらねばならないこと、そしてその筆写のゼロックスをとって私に送り、筆写の分は熊本年鑑に掲載したいとのたよりがあった。私はおどろいて、あれは生前に彼女が「がらくた」の一つとして捨てる意思を明らかにしたものであるから掲載のことは断念をねがうほがなく、筆写はぜひともねがいたいけれどもあきらめるのが至当かも知れない、といったような返事を書き、かれの良識に一縷のぞみをつないでいた。

今日のかれの手紙には、年鑑掲載の考えは取り消し、筆写は木を植える会の女性たちの何人かに奉仕的にしてもらうこと、長期を要するが何とかやりとげようとの意味が書かれてあったのである。感謝しなければならぬ。

私はかれの中国に木を植える会―熊本市九品寺三一五

―二二の提唱が私の「持養」に直接の影響はないと思うから賛意を表してきた。

（昭和四十五年五月十八日）

### 3 芥川氏の遺書

元気がかえったら、こんどこそは、彼女が「がらくた」と呼んでその焼棄をのぞんだ、その遺志を果たす準備にとりかからねばならない。それはなにほどか終末記に使用されるはずであるから、この記とのかかわりについて始末されることになる。實際問題として終末からいって始末されできないから、整理がすんだなら私の意志表示をうけたらいつでも焼棄を実行してくれることを誰かにたのんでおく方法などもとらねばならない。それには妹の静子が最適任で、もし彼女が引き受けるといちおう安心してよい。その時に臨んだなら彼女であれば忠実にこれを実行するであらう。

その「がらくた」を私は東京から水俣に運んだ。その一部は高群逸枝雑誌編集室をこしらえて取りあえず書棚におさめたが、あとの部分は私の居室の別室に雑然と積み重ねてあり、そのうちの箱つめの六個は手つかずのままである。

これはまた「がらくた」中の「がらくた」で、原稿のかきくず、不要にした草稿、研究ノート、カード、古書簡、新聞雑誌の自作雑文の切り抜き、こまごました遺品、私の書類―この記にとつてたいせつな―などが、ごちゃごちゃと詰め込まれてあるはずで、たぶん彼女の手垢や匂いがそのままのこっているから、開けるのがつらくて今日までもぐずぐずして避けていた。

思いきってきょうはじめて手近のものを一つあけてみると、まさきに、「芥川氏の遺書」と題した切り抜きが目についた。自殺は私の多年の関心事であり、最近、これに昨年の猪病のときからは好んで「死」に関する本を手あたり次第に漁り読むようになっていたのだから、それ一つを手にしただけで箱をとりてそれをさっそくベツトに持ち込んで読んだ。彼女はこれの一文の最後に、「芥川さんの自殺は、他の多くの人びとにもいろいろなことを、考えさせるであろう」といっているが、私には彼女の感想そのものについて深く感慨をそそられるものがあった。

つぎに写しておく。

芥川氏の遺書 高群逸枝

死んだ芥川さんが、遺書のなかに、この遺書は開封読



了後直ちに焼失すべしと書いていられたことは、いたく私の心をうった。

死後のことなどはどうでもよさそうなのであるけれども、事実となってみればどうもそうでないらしい。現に私などにしても、ひょっとしたら今夜死ぬのではなからうかと思われるような病氣にかかっているとき、足の爪はどうしようたいへんに伸びているが、このまま死んでしまおうかそれとも……などと考えることがある。

芥川さんもお書きになっていられたように、われわれ人間は人間獣である。生活力というものは動物力に過ぎない。しかもこの動物力は、いろいろな形をとって、最後まで私どもの上に働きかける。

人間が遺書を書いたり、その始末を後に残る人びとに依頼したりするというのが、すなわち一つの動物力の變形であろう。

なんといっても、この動物力、生きるという本能ほど強いものはない。しかも、人間がこの本能を自覚せねばならぬということは、まことにみじめなことではある。

ジャン・ジャック・ルソーはおのれの鳴嘴をディオゼネスに貸し、ディオゼネスは彼におのれの提灯を貸す。

自殺もまた、この動物力の一つの變形であるともみなさなくてはなるまい。これも芥川さんのお書き置きのなかの言葉だが、  
「僕は冷ややかに準備を終わり、今はただ死と遊んでいる」  
とある。

しかし、こんなことをあのかたがお書きになっている間も、死ということはぜんぜん意識されはしなかったろう。睡眠薬をおのみにっての後も、なお生の本能はあのかたをたぶらかし、へんにし、造作のないものにしたにちがいない。

ただ、最期の瞬間に、もしあのかたの意識がはっきりしておいて、すべてのことを客観することができたならば、それはどうであつたらうか。

おそろしいものは生でもない、死でもない、ただそれを自覚することのみがおそろしい。

よへい画伯が、臨終にあたって、「おれは死なぬ、死なぬぞおれは」と連呼しつつ、枕もとのテーブルを

あるいはまたたがい競争する。カルヴィンはソシニアスの頭髪をつかむ。かくあるうちにも、それらの力の一つの目的にむかつて進む。闇黒の中を往来し、上下して、おもむろに上層と下層を置き換え、外部と内部を交替せしめる。その同時に行なわれる広汎な活動のどん底において、悪魔は漠然と姿を現わし、人はおのおののこれのことのみを考える。盲目の自我は吼え、漁り、模索し、噛みつく。

しかしながら、このことは盲目の自我のみによることだろう。人智がすすめばすすむほど、それらの生活の本能は、明確な意識によって、自覚されてゆくといわれる。

フランス革命のとき、一人の、かなり有名な革命家が、戦場のぞんだときに、そして傷ついて、そのために死のうとするときに、

「何のためおれは死ぬ？ 社会のために？ してみると、おれという男も、よほどセンチメンタリストであつたわさ」

といったという話がある。

人間の最後のものは、やはりただ一つの動物力、生きるという本能であるらしい。

ぐんぐん押しつけたまま死んだということが伝わったとき、私は、そのみじめな意識こそ、永劫亡びない、成仏することのできない意識ではないかと思つた。

仏法に、定に入ることがある。それは仮の生命は死んでも、まことの生命は、ミロクの世まで生きながらえているということであるらしい。

死にたくないという意識が人間にある以上、そういうことも考えられないことではない。

パーミンガム大学総長オリバー・ロジは、死後の世界の存在を学理的に証明している。

ヘーゲルの三体系一致説の基調をなしているところの絶対力もしくは絶対界、それは観念的な唯心的なものであるろうかもしれないが、生命の問題をつきつめて行けば行くほど、そういうこともまた考えられなくはないのである。

芥川さんの自殺は、他の多くの人びとにもいろいろなことを、考えさせるであらう。

(昭和四十五年五月十九日)



### 刊行の趣旨ときまり

- ① この雑誌は高群逸枝に関する研究成果ならびに資料の掲載を主たる目的とし、季刊をたてまえとする。原稿生産の遅速・分量によって発行回数またページ数の増減が考えられる。編集同人の合議制によって運営される。
- ② 研究論文・エッセー・評伝・創作等、表現の形式は自由である。テキストはなるべく全集版（全10巻理論社刊）を使用のこと。
- ③ 特別寄稿＜同人外の寄稿＞のために相当のスペースをあてる用意がある。たとえば数百枚の長編でも分割完載されよう。
- ④ 「高群逸枝—自由課題」で3～5枚程度の原稿を募る。掲載誌5部贈呈。
- ⑤ 1枚内外の雑誌・全集の読後感・たよりなどを寄せてください。掲載誌2部贈呈。
- ⑥ 原稿はいつでも受けつける。しめ切りは発行日の前々月末日。
- ⑦ 購読申し込みは＜定価送料共で125円＞なるべく1年4冊分500円のこと。切手代用可。

印刷者 下田 等

### 編集室メモ

- ・第8号をおくる。二年つづけることができた。残念でならないのは石牟礼「最後の人」第八回を載せえなかったことである。運命と思うほかはない。次号続載。本誌創刊の一半の理由はこの作品発表のためであった。次のことは最初から私だけのことであるが毎号の原稿枚数を多くして第1部第2部と出版できるようにとの夢と希望ももちろん出版社はどこでもよいしわれらの編集室でもよい＞をもっていった。その希望つねに。
- ・付上「高群逸枝と柳田國男5」は真に無理して若干の時間をこの執筆のためにお創きいただいた画期的労作でどんな感謝のことばもおよばない。
- ・河野「現代の喪失2」は号を追って注視と声高めてゆくにちがいない。このミニ雑誌はまた一つの名篇を世に送ることになる。
- ・橋本「わが終末記第一回」が新載された。筆者の健康がゆるすかぎり連載されるであろう。
- ・新購読者がふえつつある。そのため個人寄贈を漸次とりやめている。前金申し込みは1,000円まで受け付けるがそれ以上は不可。
- ・雑誌の命数はあと12号3年となった。これも私＜発行責任者＞の仕事が長びいてなお体力が残されてある間は続けられるし段落のつくまでそうありたいと念ずる。 5・31(K)

この「誓い」は逸枝が惠三の自由死の意思をひるがえさせるために作ったもの。「火の国の女の日記」四八二頁参照。

折てい

われら高群逸枝の自由死の意思をひるがえさせるために作ったもの「火の国の女の日記」四八二頁参照。

運命の糸はいつか

ここにまひつて

またたきあふ

最期の一人

お見えから

1962年4月1日

# 三度目の住所変更をいたします。

お便り ★新住所

東京都大田区西馬込2-16-21 吉益 様方

高群逸枝雑誌海城版印刷局

御注文 ★従来通り

郵便局振替口座・東京165736・高群逸枝雑誌海城版印刷局  
に定価＋送料を御送金下さい。一号のみ二五〇円。二号からは  
二五〇円。送料は四〇円。御希望の号数を明記するのをお忘れなく。